
Last words

斎藤一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last words

【Zマーク】

Z8466Y

【作者名】

斎藤一樹

【あらすじ】

学校一の美少女と噂される、白鳥百合。生まれつき心臓が悪い彼女は、平凡な僕の恋人だった……。

Last words -01 (前書き)

一年ぐらい前に書いた作品（未公開）のリメイク版です。短期集中連載で、2011年中に完結する予定です。

世界観をDailyseriesと共有しており、別のDailyseriesリーズにもこの作品のキャラが登場します。

幼い頃、僕の大切な女の子が死んでしまった。尤も幼いとは言え、小学四年生の時の事だったので、そこまで幼かつたわけでも無いが。彼女は僕にとって掛け替えの無い親友であり、幼なじみであり、初恋の相手でもあり、そして、

……僕の、恋人だった。白鳥百合という名前の彼女は、生まれつき心臓が弱く、体育の授業は基本的にいつも見学していた。彼女はその年代の女の子にしては珍しく、可愛いというよりも綺麗といった形容が似合う容姿をしていた。身体が弱い、ということも相まって、どこか儚げな印象があつた。

そういうわけもあり、また彼女は誰にでも優しかったので、彼女はクラスのアイドルのような存在だった。小学三年生ぐらいになると、皆異性の事を意識し始める。彼女に告白した男子は数え切れない程いたが（学年の男子の半分ぐらいが告白したのではないだろうか）、彼女が誰かと付き合っているという噂を聞いたものは誰もいなかつた。

そんなある日、僕は彼女と田直で一緒にになった。その日の放課後、僕は彼女と二人切りで黒板掃除（田直の仕事）をやつていた。教室には、僕たち二人以外には誰も居ない。

彼女は僕に色々と話し掛けてくれる。でも僕は照れ臭くて、更に緊張も手伝つて「ああ」とか「うん」とか、無愛想な答えしか返すことが出来なかつた。

程なくして、黒板掃除は終わつた。僕は黒板消しを置いて、自分の席へランドセルを取りに行こうとした。

そんな時だつた。僕の背中に、声が投げ掛けられた。

「ねえ、あたしと話していく、楽しくなかつた？」

その一言に、僕は内心とても慌てた。そんなつもりはない、そう言おうとした。

しかし、白鳥は僕の言葉を聞かず、更にまた僕に言葉を投げ掛けた。

「……ねえ、もしかして伊達君って、あたしの事、……キライ?」

「……そんな事は無い!」

反射的にそう、言葉が口を突いて出でていた。少し、怒鳴るような口調になってしまった。しかし、どうせに出た言葉ではあったが、その実、この言葉は紛れもなく僕の本心である。

「じゃあ、……あたしのこと、」

白鳥は、その先を口にするの躊躇つかのようになに言葉を切り、そして決意したのか、更に言葉を重ねる。

「…………好き?」

背中越しに見遣ると、彼女は心細げな、そして不安そうな表情でこちらを見ていた。その姿は、拒絶されることを恐れているかのようだ。

振り返り、僕は白鳥に向き直った。嫌いである訳がない。彼女がアイドルの「ことき扱い」を受けていたのは前に述べた通りである。勿論僕も、彼女に告白こそしていないものの、彼女の事が好きだった。だから、彼女に向き直り、その目を見据えて、はっきりと告げる。

「僕は、白鳥のことが……好きだ」

たぶんこれは、いつまでも決して揺らがない想い。それを言葉に乗せて、彼女へと贈る。

「だ、伊達君!」

リンゴ飴のように真っ赤になつた顔を落ち着けるかのように深呼吸をすると、白鳥は僕の名を呼んだ。そして。

「あたしも、その、伊達君のことが好きです。だから……あたしと、付き合つて下さいつ!」

……頭の中、ショートするかと思つた。

翌日。朝起きると、すぐに昨日の放課後のことと思い出した。知らず、頬が熱を持った。取り敢えずベッドから抜け出し、着替えを始める。

白鳥からの告白は、もちろんOKした。

帰り道は、一緒に並んで歩いた。やっぱり相変わらず僕は照れくさくて、少し不愛想になってしまったけれど、それは彼女も同じみたいで、あまり僕達は会話をしなかった。でも、お互いの手は指と指とを絡ませ合い、しつかりと握られていた。

そんな、どこか恥ずかしくて、それでもどこか胸の奥が暖かくなるような心地よさのある沈黙の中で、僕たちは、少なくとも僕は、確かに幸せだったんだ。

Last words -02 (前書き)

キリのいいところで区切ったので、今回は結構短いです。

彼女に告白されだから、あつという間に一ヶ月が経過した。

その間に僕と彼女は、お互いの家に遊びに行ったり動物園に行ったりと、そんな楽しい日々を過ごしていた。

何の根拠もなかつたけど、そんな楽しい日々が、いつまでも続いいいくと思っていた。いつも、その幸せが続くことが当然のことだ、と思っていた。

だから、僕は気が付かなかつた……いや違う、気が付かなかつたんじゃない、気が付こうとしなかつたんだ。

そんな幸せな日常の終焉を告げる足音が、少しづつ迫つてくる」と。

その日は、よく晴れた日曜日だった。僕と白鳥は近くの水族館に行き、例によつてデート。水槽の壁の近くまで泳いで寄つてきたウミガメにはしゃいだり、アシカショーに興奮したりと、白鳥は終始楽しげだった。そして、その笑顔をすぐそばで見続けていることが出来た僕もまた、このデートを楽しんでいた。

日が傾き始めてから数時間が経り、空が朱に染まり始めた頃。

「また明日、学校で」

白鳥の家の玄関前まで彼女を送つて、別れ際にこう言つと、

「今日はありがとうね、伊達君」

語尾にハートマークが付きそつた声でさう言つて、彼女は僕の唇に、そつとキスをした。

体感時間で一分間ほど。多分、実際にはそんなに長くなかったのだろう。

彼女も恥ずかしかったのか、頬を朱く染めながら、照れ隠しのようになに

「じゃ、じゃあ、また明日ね！」

と言つて、タタタツと小走りに家中に入つていつてしまつた。

彼女が去つて行つた後も、しばらく僕は呆然と立ち尽くしていた。

「……今ひとつ」

呟きつつ、唇の、先ほど触れ合わされた場所を、そつと指で押さえた。

「……やっぱり、ファーストキス……？」

ファーストキスはレモン味、とか聞くけれど、緊張で味わうどころじやあなかつた。

次回、物語が動きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8466y/>

Last words

2011年11月27日12時48分発行